

## 楔形文書にみる土器生産

依田 泉

Ceramic Production as Recorded in Cuneiform Texts

Izumi YODA

土器に関する楔形文字資料の中で、3千年期末の新シュメール時代のテキストは、容器の種類とともに、製造日数と容量と個数を記録している。これにより、土器の細かな分類と厳密な規格化が進んでいること、統治組織が土器生産を管理しようとしたこと、そして、大量生産が行われていたことが窺い知られる。他方、4千年期後半から3千年期初頭に作成された「ウルク古拙文書」は、後の時代のような文字の並列によってだけでなく、複合文字によっても土器を表現するが、そこでは、土器を示す文字の多様性が、土器の分化の展開と、おそらく規格化の開始を示している。

キーワード：楔形文字、土器、メソポタミア、新シュメール時代、ウルク

*Among cuneiform sources relevant to ceramics, one Neo-Sumerian text (dated to the end of the third millennium B. C.) records the required days for production, the capacity and the number of each type of container. This indicates 1) the close classification and the exact standardization of ceramics, 2) the intention of the administration to control ceramic production, and 3) the practice of mass-production. The archaic texts from Uruk (dated to the second half of the fourth through the beginning of the third millennia B. C.) seem to already point in such a direction: they make distinctions and anticipate the standardization of ceramics by showing many pictographic signs related to them.*

Key-words : cuneiform texts, ceramics, Mesopotamia, Neo-Sumerian, Uruk

### はじめに

さまざまな楔形文字資料のうち、土器についての情報源として、容器類の詳細かつ緻密な区分によって生産の組織化を窺わせる新シュメール(Neo-Sumerian)時代のテキストと、現時点において最古のまとまった文字記録であり、したがって、土器に関連する最初の文献もある、ウルク(Uruk)出土の「古拙文書<sup>1)</sup>(archaic texts)」は、代え難い重要性を帶びている。ここでは、メソポタミア歴史時代初期の土器製造の解明に寄与するであろうこの2つ資料から、注目される内容を取り上げてみたい<sup>2)</sup>。

### 「新シュメール時代」の土器についての記述

3千年紀末の「ウル第三王朝(Third Dynasty of Ur)期」とも呼ばれるこの時代に、メソポタミアでは政治的統一が実現し定着しつつあった。そのような脈絡で残された行政経済文書(socio-economic textsまたはarchival texts)には、統治組織つまり「国家」による体系的な経済活動への介入が読み取れる。そして、土器の製造もその一例とし

て解釈することができよう。たとえば、どのような土器が、どれだけの時間をかけて、いくつ作られたかを記録したテキスト(Waetzoldt 1971: 7-39; 前川 1989: 67, 69)が、おそらく政府の管理の下で作成されている。はじめに、本節では、この資料に焦点をあて、当時の土器生産の状況を探ることにする。

まず、問題の文書には、土器を表す文字の用法の点で、以前の時代に比べてよりはっきり現われてきた特徴がある。すなわち、「容器・土器一般」を指す文字 DUG<sup>3)</sup>が、後述するウルク文書でのように他の文字と一体化して新たな文字をつくるのではなく、1) 文字の並列による単語の最初の部分となるか、あるいは、2) 後に続く単語が容器を表わすことを示す決定詞<sup>4)</sup>として使われるかする、ということである(前川 1989: 65)。そして、これは、後代の楔形文書に永く受け継がれる方法なのである。

さらに、テキストの記述を検討してみると、それが当時の土器の生産形態について示唆に富んだ内容を含んでいることがわかる。すなわち、容器の種類が列挙され、それぞ

れが完成するのに何日を要し、また、どれだけの容量をもっているかが記されている。そして、それによっていくつか

の推論が成り立つのである。以下は、その一部を抜粋して種類ごとに整理したものである。

		日数	容量(単位 sila <sub>3</sub> ) <sup>5)</sup>	推定される意味 <sup>6)</sup>
① dug 類	dug-10(-sila <sub>3</sub> )	1/3	10	「10シラの壺」
	dug-15(-sila <sub>3</sub> )	1/2	15	「15シラの壺」
	dug-20(-sila <sub>3</sub> )	-	20	「20シラの壺」
	dug-30(-sila <sub>3</sub> )	1	30	「30シラの壺」
	dug-GAR-1-sila <sub>3</sub>	1/4	1	「1シラのパン (?) の壺」
	dug-GAR-2-sila <sub>3</sub>	-	2	「2シラのパン (?) の壺」
	dug-GAR-5-sila <sub>3</sub>	1/3	5	「5シラのパン (?) の壺」
	dug-kur-KU. DU <sub>3</sub> -1-gur	10	30~600	(不明)
	dug-ni <sub>3</sub> -lah	1/4	5~10	「洗浄の壺」
	dug-NIGIN <sub>2</sub> -da	1/2	10	(不明)
② sila <sub>3</sub> 類	dug-sila <sub>3</sub>	1/2	10	「頭の壺」
	dug-sila <sub>3</sub> -imin	1 1/2	10~30	「7つの乳首の壺」
	dug-sila <sub>3</sub>	-	1	「杯」
	dug-sila <sub>3</sub> -ban <sub>3</sub> -da	1	10	「小さい杯」 <sup>7)</sup>
	dug-sila <sub>3</sub> -gal	1/10	1	「大きい杯」
	dug-sila <sub>3</sub> -KU. DU <sub>3</sub>	1/15	1	(不明)
	dug-sila <sub>3</sub> -sa-du <sub>11</sub>	1/15	-	「捧げ物の杯」
	dug-sila <sub>3</sub> -sag-ga <sub>2</sub>	1/10	-	「頭の杯」
	dug-sila <sub>3</sub> -za <sub>3</sub> -HAR	1	-	(不明)
	dug-sila <sub>3</sub> -za <sub>3</sub> -LI	1/4	1	(不明)
③ utul <sub>2</sub> 類	dug-utul <sub>2</sub>	-	1~60	「鍋・釜」
	dug-utul <sub>2</sub> -10(-sila <sub>3</sub> )	1/2	10	「10シラの鍋・釜」
	dug-utul <sub>2</sub> -60(-sila <sub>3</sub> )	2	60	「60シラの鍋・釜」
	dug-utul <sub>2</sub> -gal	1 1/2	-	「大鍋・釜」
	dug-utul <sub>2</sub> -muru <sub>x</sub>	1	30	「中鍋・釜」
	dug-utul <sub>2</sub> -tur	1/4	5	「小鍋・釜」
④ その他	dug-lahtan <sub>x</sub> -1-gur	10	600	「ビールの大壺」
	dug-lam-ri <sub>6</sub>	1/2	10~15	「桶」
	dug-ma-an-hara <sub>4</sub>	2/3	3~20	(不明)
	dug-za-hum-i <sub>3</sub>	1/10	1	「油の...」
	dug-zi <sub>2</sub> -tu-ru-um	1/6	1	(不明)

さて、このリストから、何を読み取ることができるだろうか。ここでは、次の四点を指摘したい。第一に、土器が非常に細かく分類され、様々な名称が付けられ、そして、特にその区分の基準として器の容量が重視されている。これは、①類の dug や dug-GAR、また、③類の utul<sub>2</sub> の記述ではとりわけ際立っている。このことから、そのときすでに土器の規格化がかなり進んでいたと判断されるのである。第二に、テキストで言及されるほとんどの容器は、製造の所要日数についての記載を伴っている（前川 1989: 69）。見方を変えれば、一日に何個制作できるかも伝えられ

ている。これは、統治組織が生産量を把握し、さらに、統括していたことを暗示していないだろうか。第三に、②類と④類の中で観察されるように、器によっては、容量が同じでも完成までにかかる時間が異なることがある。用途や形状が違えば、制作過程の複雑さが変わるのは当然のことではあるが、それだけ多様な容器が製造され使用されていたということが注意される。第四に、上には挙げなかったが、それぞれの項目には作られた個数の記録が付加されることもあり、例えば、②類の「捧げ物の杯」は少なくとも 60,217 個を数えられることが報告されている（前川 1989:

69)。この数字は明らかに大量生産という背景を指し示すものであろう。

以上のような特徴は、新シュメール時代に尖鋭化するが、それ以前の「初期王朝（Early Dynasty）期」の資料にもある程度表出し始めていた。それだけでなく、土器の分化について言えば、表現形式の違いはあれ、さらに時代を遡って「ウルク期」にすでに示されていたと理解することができる。この点が次節の主題である。

### 「ウルク古拙文字」による土器の表現

ウルク古拙文書は、4千年紀後半から3千年初頭にかけて、何らかの公共組織がその財産の管理などに用いたある種の行政経済の記録であった、と考えられる。そこには、土器のほかにも種々の物品と結びつきのある文字が並べられているテキスト、また、土器に関する単語ばかりを羅列した「語彙リスト（lexical lists）」などが含まれる。後者については、工房が職人に体系的に名前を覚えさせるために作成した、という可能性もあるが、同じ文書の中に織物と土器が言及されるという事実（前川 1989: 63）が、この解釈を困難にしている。

土器に関する「ウルク古拙文字」で独特なのは、ひとつの文字の中に別の文字を組み込んで新たな文字を作り出すという方法である<sup>8)</sup>。具体的には、後代の資料により「壺」または「土器全般」を示すと理解される文字 DUG (☱) に多く生じる現象で、その内側に様々な事物を表す文字が描かれるという形式をとる<sup>9)</sup>。既に述べたように、これは、時代の経過とともに、ふたつ以上の文字が独立のまま並列する仕方に全く取って代わられる運命にあるという、今のところこの時期に固有の方法なのである<sup>10)</sup>。

では、DUG の中に組み込まれるほうの文字は何を表わしているのだろうか。それを分類すると、次のようになる。

#### ①動物を表す文字

雌牛 (AB<sub>2</sub>)、ロバ (AN Š E)、魚 (KU<sub>6</sub>)  
竜またはサメ (KUSU<sub>2</sub>)、ヤギ (MA Š=半分⑧)  
鯉? (SUHUR=髪⑤)、豚 (Š AH)

#### ②植物に関する文字

木 (GI Š)、クミン (GAMUN →③)<sup>11)</sup>  
(石鹼用) アルカリ性植物 (NAGA)  
葦の束または網 (SA×GI →③④)<sup>12)</sup>、大麦 (Š E →③)  
大麦粉 (Š E×ZID<sub>2</sub>→③)  
草 (U<sub>2</sub>)

#### ③何らかの作物・産物を表す文字

ミルク (GA)、クミン (GAMUN →③)、銀 (KU<sub>3</sub>)  
油 (I<sub>3</sub>=経過する⑦)、羊毛 (SIG<sub>2</sub>)

葦の束または網 (SA×GI →②④)

大麦 (Š E →②)、大麦の粉 (Š E×ZID<sub>2</sub>→②)

#### ④何らかの製品を表す文字

くびき (BIR<sub>3</sub>)、束または網 (SA →②③)  
葦の束または網 (SA×GI →②③)  
矢 (TI=肋骨⑤、届くまたは生きる⑦)

#### ⑤身体部位を表す文字

耳 (GE Š TU)、膝 (HI=良い⑥、交ぜる⑦)  
手 (Š U →②)<sup>13)</sup>、髪 (SUHUR=鯉?①)  
肋骨 (TI=矢④、届くまたは生きる⑦)

#### ⑥様態に関係する文字

黒または暗い (GI<sub>6</sub>)、良い (DU<sub>10</sub>=膝⑤)、混ぜる⑦)  
豊富さ、華麗さ (LAM)、赤 (SI<sub>4</sub>)、黄(緑) (SIG<sub>7</sub>)

#### ⑦動詞になる文字

分ける (BA)、変える (BALA=順番⑧)  
混ぜる (HI=膝⑤、良い⑥)  
残る (TAG<sub>4</sub>)、経過する (ZAL=油③)  
届くまたは生きる (TI=矢④、肋骨⑤)

#### ⑧その他

順番 (BALA=変える⑦)、旅 (KASKAL)  
山または外国 (KUR)<sup>14)</sup>  
(数字の) 1 (A Š)<sup>15)</sup>、半分 (MA Š=ヤギ①)

このように DUG は、多岐にわたる物品や事象を表わす文字を自身のうちに組み込み、新たな文字となっているのである。

次の問題は、このできあがった複合体が何を指しているか、ということである。すべての例について答えを出すことは現時点では不可能であるが、組み入れられた文字の解釈をもとに想像することができるものもある。たとえば、①の動物や⑤の身体部位のときには、そのような形状の容器を、また、⑥の様態のときには、そのような色や性質などのものを、それぞれ表現している、と推測できる。また、「大麦」について主張されるように<sup>16)</sup>、DUG と③の作物や産物を表わす文字との組み合わせは、そういったものを中に入れるために容器に対応している、と考えられる。さらに、⑦の動詞の場合には、そのような作業と結びつく容器を示しているのかもしれない<sup>17)</sup>。

このような数多くの複合文字の出現は、DUG という文字または単語によって総称される多様な容器を分類して表示しようとする試みのように見える。そして、そこに規格化の始まりを察知するのは行き過ぎであろうか<sup>18)</sup>。

#### おわりに

以上のことから、新シュメール時代には、容量をもとに厳密に規格化された土器が細かい区分を提示し、それにと

もなって、多種多様な容器が、ある場合には大量生産として、製造され、使用されていたことが窺われる。そして、その生産活動を、統治組織つまり「国家」が統率しようとしていた痕跡もある。しかし、このような土器の多様化と分化は、突然出現したのではなく、すでにウルク期において始まっており、したがって、規格化についても少なくとも予兆が見られ、それが文字の中に表現されていた、と考えられるのである。

註

- 1) ウルク期の文字は、厳密に言えば、楔形文字 (cuneiform) ではなく、絵文字 (pictograph) ではあるが、系統として連続していることから、ここでは、その文書も「楔形文字資料」として扱っている。
- 2) アッカド語を使うセム人の時代である2千年紀から1千年紀に作成された、シュメール語教育用のテキストにも、土器の名称のリストが認められ、これも無視できない資料ではあるが（前川1989：65, 67参照）、ここでは社会の実状をより直接に語る文書について論じることとした。
- 3) 大文字を用いるのは、文字を識別する際の表記である。読みを表わす場合には小文字となる。
- 4) これは、単語を構成する一部というよりも、それに付加される要素ととらえられ、表記の上では、上付きの文字が使われる。
- 5) 1シラは約0.5リットルと考えられる。
- 6) dug, lahtan, sila<sub>3</sub> および utul<sub>2</sub> (=udul<sub>2</sub>) については前川1989：69も参照。
- 7) この「小さい」と次の項目に付けられた「大きい」という形容詞は誤って逆に使われた可能性がある。
- 8) これは、それぞれに意味を持つ文字が組み合わされる「会意文字」といえる（吉川1990：36）。
- 9) 土器を表わす文字は、DUG以外にも、前節で触れられた LAH-TAN<sub>2</sub> をはじめ、AGAR<sub>2</sub>, GA'AR, GAN, IR, KISIM, MUD, NI,

SAKIRなどがあるが、ここでは、とりわけ顕著な特徴をもつという理由で DUG に限定している。

- 10) ただし、ウルク文書に文字の並列による土器の表現がなかったわけではない。
- 11) この文字の前に Š U 「手」を置く表現もある。
- 12) 掛け算の記号 (×) は、ひとつの文字が他の文字に組み込まれて一体化している場合に使われる。
- 13) この文字は、DUG の中に GAMIN「クミン」が書かれたもの (②および③) に組み入れられるのではなく、その前に並列されるので、意味合いが異なる可能性もある。注11参照。
- 14) この文字との組み合わせに、さらに LAM「豊富さ、華麗さ」(⑥) を付け加えたものもある。
- 15) この文字にさらに KU<sub>3</sub> 「銀」(③) を付け加えたものもある。
- 16) ŠE「大麦」と組み合わされた文字は穀物保存のために用いられた容器を示している、という意見が表明されている。（前川1989：61）
- 17) 構成要素がここに挙げられた複合文字ほどはっきりはしないが、やはり DUG から派生した文字として、モルト(BAPPIR)とビール(KAS)のそれがある（前川1989：61）。
- 18) ここで、古代において文字は宗教的・呪術的な性格を付与されていたので、その点を考慮に入れなければならない、という千代延恵正氏の指摘は傾聴に値する。

参考文献

- Green, M. W. and H. J. Nissen 1987 *Zeichenliste der archaischen Texte aus Uruk, Berlin.*  
Waetzoldt, H. 1971 *Zwei unveröffentlichte Ur-III- Texte über die Herstellung von Tongefässen, Welt des Orients 6: 7-39.*  
前川和也 1989 「シュメール粘土板記録における土器と陶工」大津忠彦編『古代中近東の土器—変遷とその背景』 59~71頁 中近東文化センター。  
吉川 守 1990 「NHK 大英博物館1 メソポタミア・文明の誕生」 日本放送協会。

依田 泉  
常磐大学国際学部  
Izumi Yoda  
Tokiwa University